

雪に残した 3

●山岳長編推理小説

新田次郎



ポケット・ライブラリ

雪に残した3

著 者 新 田 次 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社
会社

東京都新宿区矢来町71番地
電話東京 (341) 7111-9番
振替東京 8 0 8 番

印 刷 所 株式会社 金 羊 社

製 本 所 植 木 製 本 所

定 価 1 8 0 円



1962年11月25日 印刷
1962年11月30日 発行

乱丁、落丁本は本社又
はお買求めの書店にて
お取替えいたします。

新 田 次 郎

雪に残した 3

ポケット・ライブラリ

32

新 潮 社 版

雪に残した3

|| 山岳長編推理小説 ||

氷^ひ 雨^{さめ}

原生林の奥はまだ雪が深かった。木の芽は僅かにふくらみを見せてはいたが、葉が出るまでには、なおかなりの日にちがかかりそうだった。しかしその雪も、山麓に近づくに従って、少くなり、万太郎谷の中央を流れる川のほとりまで来ると、雪は日かげに僅かにその残骸^{さんがい}を見るに過ぎなかった。

そこには春が来ていた。ところどころにコブシの白い花が咲き、いっせいに木の芽が吹き出そうとしていた。日当りのよい傾斜地には岩かがみの群落が薄桃色の花を咲かせていた。

エクラン山岳会が合宿訓練のためにテントを張ったのは吾策新道と谷川新道との分岐点を更に万太郎谷に添ってしばらく登った、通称カラボリ台地と呼ばれるところであった。三方山にかこまれた僅かな面積の台地で天気の良い日には、ここから茂倉岳、オジカ沢の頭、小障子^{しょうじ}、大障子^{とよじ}、万太郎岳などのいただきがよく見えた。

合宿が始まって二日目の午後に天気が悪くなった。

エクラン山岳会のテントの色は濃い黄色であった。そのあざやかな黄色も、谷にそって流れ

おりて来る濃い霧に包みかくされて、五メートルも離れるともう見えなかった。訓練は昼過ぎに中止された。夜になると風は強くなり、激しい雨になった。

「ひどい雨、それに濃い霧……」

菊地奈智子が、懐中電灯の光をテントの換気口から外へ向けて云った。懐中電灯の光に雨足が白く光った。つめたい風と雨しぶきが換気口から吹きこんで来る。

奈智子は、いそいで換気口の開閉緒を引ばって閉じると、懐中電灯を彼女の手首にやった。九時だわと小さい声で云った。外は風と雨だし、せまいテントの中では男たちが歌を歌っていた。テントの一番奥にいる奈智子が、テントの外をうかがったことも、腕時計に光を当てたことも、山の歌を合唱している山岳会員たちには気づかれないほど、ささいなことだったにもかかわらず、九時だわと彼女が云った時、歌声の間に隙間ができた。

「そんな時間かしら、もうだめね……」

そう云ったのは奈智子と並んでいる杉山美根だった。歌声はそれでやんだ。もうだめねという美根の声が、異様なひびきを与えたからである。美根がもうだめねと云ったのは、今日来る筈になっている三人の会員たちのことを云っているのである。この時間までに来なかったら、もう今夜は来ないだろうという意味であった。

土樽山の家を基点とする吾策新道は完備していた。懐中電灯を持って注意して登ってくれば来られないことはない。それに今日来る筈になっている三人の会員のうち、市岡正一は去年の

秋、ここにテントを張った時同行しているから、道はよく知っていた。

「さあ、そろそろ寝ようか、この雨の中をあいづらが今ごろ登って来る筈がない、今夜は吾輩さんのところへ泊って、明日朝早くやって来るに違いない」

エクラン山岳会長の星野徳郎が云った。

「今から寝たって眠れそうもないな」

坂村芳雄が不平そうに云った。

「寝袋に入っても歌は歌えるだろう、ローソクは一本だけつけて置いてもいい……」

星野はみんなの顔を一樣に見渡して、

「それが消えたら、ほんとに眠ることにしよう」

狭いテントの中で、ひとりずつ寝袋に入っていた。奥の方に女性が二人、入口に近く男が三人並んで寝ても、九人用のテントにはまだ余裕よゆうがあった。寝袋の中にひとりずつ落ちついてしまうと、また歌の合唱が始まった。

奈智子も歌っていた。歌っていると、外の風雨のことは気にならないが、歌うのをやめると、この風雨について、市岡が登って来るような気がしてならなかった。

「あの道はよく知っている、おそくなってもきつと行くから」

奈智子は市岡が電話で云ったことを思い出していた。市岡が風雨を衝いて登って来なければならぬ理由はなにひとつないが、奈智子には市岡がやって来るように思われてならなかつ

た。しかし奈智子は市岡を待っているのではなかった。こんな夜に無理をして来て貰いたくはなかった。会長のいうとおり、土樽山の家へ一晩泊って、明日の朝、早く登って来ることをほうを望んでいた。にもかかわらず、彼女が市岡が来はしないかと思っているのは、市岡に対する特別な感情というよりも、この場合は、市岡という男の性格を考えたからである。

彼は強情な男ではない。どちらかといえば彼は妥協的な男で、いつもなにか冗談じよたんを用意しているような男だった。市岡がいるかいないかで会の雰囲気ふんいきが違った。彼の軽快なしゃれや、なによりも明るい笑いはエクラン山岳会になくてはならないものだった。彼は時折人の意表をつくようなことをした。

打合うちあわせてあった列車に乗り遅れたものと思っていたら着駅で、一等車から大きな荷物を背負おって悠々ゆうゆうとおりに来たり、ポケットの中におもちやの蛇をしのばせておいて会員を驚ろかせたり、彼のすることは、そんないたずらが多かった。奈智子の気がかりはこの点にあった。

（おそくなってもいくよ、きつといく、もし奈っちゃんが眠ねっていたら鼻をつまんでやる）市岡は遅くなっても、登ってきて会員たちをあとと云わせるつもりなんだ。濡れるのはいいとして、カラポリ台地でテントが発見できるだろうか、テントは道からかなり離れているし、秋の合宿訓練をやった場所とも違う。

勿論懐中電灯は持っているだろうが、この霧の中では足元を照らすのがせいっぱいであら

う。だとすると、彼が、ここへきて、テントを発見できる手掛りとなるものは、テントの中で怒鳴っている歌声ぐらいなものである。

(しかし、この風と雨でしよう、この声がどこまでとどくかしら)

彼女の心の中にそういう不安が起ると、彼女の声は自然に低くなり、歌をやめて耳を外界に向けるのである。もしかしたら市岡の声が聞えるかも知れない。

(もし、道を迷ったら)

道を迷うようなことはない。川は水量が増し、音を立てて流れてはいるけれど、懐中電灯を持ってさえいれば、そうたやすく、落ちこむことはない。

「それにあのひとはひとりではないわ」

奈智子はそのままで考えて来て、今日中に来る筈になっている会員は市岡正一のほかに、朝香修平と安係子一彦がいることに気がついた。

「なにか云ったの奈ちゃん」

美根が歌うのをやめて云った。

「寒くなったわね」

「そう、ここでは雨だけれど、稜線に出ると雪か氷雨^{ひきふ}ね、雪だったら、なんとかできるけれど、氷雨だったらいへんなことになるわね」

美根は寝袋ごと奈智子の方へ寝返えりを打って云った。

「たいへんなことって？」

「遭難よ、飛石連休だから、この谷川周辺にだけでも、登山者が何千人って入っているでしょう。そのうちの何人かは稜線でビバークしている筈よ、雪にしても氷雨にしても、この一晚で何人かがやられることは確実よ」

美根は遭難が起ることの方がむしろ当り前のような言葉使いをした。

奈智子は遭難と聞いただけで、すぐそれを市岡正一に結びつけた。市岡は稜線にはいない。居るとすれば、吾策新道を万太郎本谷に添ってこっちへ歩いている、ここでは氷雨は降っていない。

「でも、美根さん、もう五月よ」

「五月っていつても、今日で四日目よ、山には冬と夏しかないという定義に従えば、稜線はまだ冬よ」

「そうねえ、稜線はまだ冬だわ」

奈智子は美根の言葉に同意した。吹きさらしの稜線は雪は消えているけれど、ちょっと日かげに入ると未だに雪である。仕末に負えない、くされ雪だ。奈智子は、きのう見て来たばかりの万太郎尾根の稜線を思い出した。稜線に氷雨が降っている。その中を、頭にヘッドランプをつけて、這うようにして歩いている登山者がいる。市岡正一である。

奈智子は首をふった。いやな連想だ。市岡正一は土樽から吾策新道を歩いて来るかも知れな

いが、万太郎岳の稜線にいるなどということは考えられないことであつた。

奈智子は寝返りを打った。余計な心配をしているより歌でも歌った方がと思つたのだが、テントの中は異様に静かであつた。あれほど大きな声で怒鳴つていた男たちが、急にだまりこんだのは、やはり、美根が遭難ということばを口にしたのが原因のようにも考えられた。

「つめてえな、氷雨だぜ、氷雨になりかけの雨だ」

坂村が、テントの合わせ目から、外へ手を出して云つた。

ローソクの火がゆらめいて消えた。全くの暗黒となつた。懷中電灯の光がついて直ぐ消えた。

「十時だ、歌をやめて寝よう、多分明日の朝はこの雨も止むだろうからな」

会長の星野が云つた。

土樽着の下り最終列車は午後七時三十七分である。市岡正一たちが土樽から歩いたとして、昼なら一時間半あれば充分であるが、夜だし雨が降っているから、充分な余裕を取っても十時までには来なければならぬ。星野が十時と云つたのは、星野の頭に三人の会員のことがあつたからである。

「次の下りは何時かしら」

奈智子は隣りの美根に小さい声で聞いた。

「次というと朝の一番ね、三時よ、その次が五時、それから八時……来るとすれば、三時か五

時ね、三時で来れば、土樽山の家でしばらく待っていれば夜も明けるし、五時で来ればそのまま山へ入れるわ、どっちみち市岡さんたちが、ここへ着くのは明日の朝の六時頃ね」

そうであつて欲しいと奈智子は思った。

「なにも心配することはないわ」

美根が云った。

「心配なんかしていない」

「それならお休みなさい」

美根が寝袋のチャックを引上げる音がした。静かになると、テントの外の風の音が聞えて来る。

風は南風である。テントの南側に吹きつける雨の音がはげしいのに、北側はそれほどない。耳をすませて風の音を聞いていると、ずっと遠くに、奈智子の位置からすれば、空の高いところに、連続したひびきが聞える。風の音には聞えなかった。山とは無関係に空の上の方にある、なにかの現象音のように思われてならなかった。

谷川の音を聞き違えているのではないかと思った。ゆうべも、おとといの夜も、谷川の音は聞いたが、今夜は風の音に消されて聞えない。谷川の音があんなふうに聞える筈はない。するとあの音はなんだろう。

風速はかなり増したようであつた。外は暴風雨となつていても、テントの中は意外に静かだ

った。五人の人間が眠っているとも思えないほどしんとしていた。ひょっとしたら、五人は五人とも、眠らずに眼を開いているのではないかとも思われる。暗黒なテントの中で、五人ともそろって、眼を見開いて、考えごとをしている光景を考えただけで気味が悪かった。

市岡のことは奈智子の頭にずっとあった。考えたところでどうにもならないことだが、不安でならなかった。じつとしていると、風の強さや方向が変っていくのがよく分る。風は南から西の方に廻りつつあった。雨は一層はげしくなる。

奈智子はいつの間にか眠っていた。へんな音を聞いて眼を覚すまで、彼女は確かに眠っていた。

音は短い叫び声に似ていた。あるいは笛の音といったふうにも表現できないことはなかった。奈智子は眼を開いて、その音を再確認した。

テントの中で人が起き上る気配がした。懐中電灯がついて直ぐ消えた。星野が起き上って時計を見たのである。

星野は起き上ったままで、しばらく、そのままの姿勢でその音を聞いていた。音は風速が強くなった頂点で聞えた。彼はその音の発生原因が風にあることを確かめると、再び寝袋にもぐった。三時である。もう一時間半もするとそろそろ夜が白みかけるのだ。風は北にかわっていた。温度は降下していた。

奈智子が遠慮勝ちに起き上って、換気口のひもを引張る様子だった。星野は、懐中電灯を換

気口に向けた。換気口には虫よけのこまかい網が張つてある。そこに氷の膜ができていた。やはり、温度の低下と共に氷雨にかわつたのである。

ふたりはひとことも云わなかつた。それだけを確かめると、またもとのように寝袋にもぐつた。

奇妙な音は再び聞えなかつた。

それからは風速が漸減していつて夜があけると雨はやんでいた。ひどく寒い朝だった。

「今日の訓練は予定どおりデトドウキョウ沢でやることにしよう。沢の様子を見にいつて来る。六時までには帰えるからな」

星野徳郎は坂村芳雄をつれて五時にテントを出た。後に残された三人のうち、奈智子と美根は六時までに朝食の用意をすることに不平はないようだったが、偵察に連れていかれない安井光雄はいささかふくれ面をしていた。

「今朝の炊事当番は俺じゃあない筈だ」

安井光雄は、その文句を会長の星野には云わずに、彼等が去つた後でひとりごとのように云つた。その朝の当番は坂村芳雄と杉山美根になつていた。

雨は完全に上つていた。雲はかなり薄くなり、谷の半ばまで姿を見せていた。星野はキャンプ地のすぐ北側にある倒木のところで立止つて、

「こいつだな、夕べ妙な音を上げたのは」

倒木は山の方を向いていた。倒木の心は空洞となっていた。

背稜から吹きおりてくる風が、倒木の空洞を吹き通って妙な音を出したのだなと思った。

星野は倒木を一まわりして、テントの傍で立っている三人にピッケルを上げた。その意味が奈智子だけには分った。

夕べのへんな音の震源地を、星野は確めたのだなと思った。奈智子は、眼を吾策新道の方へ向けた。もし市岡が三時着の汽車で来たとしたら、もうそろそろ来てもよさそうな時間だと思っ

った。

星野徳郎は倒木を大きくひとまわりすると、万太郎谷を奥の方へ向って歩き出した。テント場と隣接するところに小さな雪溪がある。彼等が、冷蔵庫と呼んでいる場所である。そこを通り

こして、オベタテ沢の入口にコブシの木があった。雨水で花は一夜のうちに首を垂れていた。オベタテ沢は全体としては雪でつまっていたが、下部の方はところどころに口が開いて、水

が流れていた。割れた穴からみると、雪溪は一メートルにも及ぶ厚いものだった。

星野は靴の先で、雪溪の雪を蹴った。あれほど雨が降ったにもかかわらず、雪面は意外に固

かった。

星野は樹林の中を更に奥へ入っていった。デトドウキヨウ沢はオベタテ沢よりも雪でつま

っていた。星野は、その雪溪を登りだした。

きのうまでは沢の雪溪はすべてくされ雪であり、踏めば足型がちゃんとつく残雪であった。